

探鳥会スタッフ通信 2013年 11月号

「探鳥会スタッフ通信」は、探鳥会の考え方や様々な運営手法について、全国の連携団体の探鳥会リーダーの皆様と情報交換を行うための通信です。

目次

- ◆安西英明の探鳥会講座
「フィールドマナーの歴史や背景」・・・1
- ◆探鳥会のリスクマネジメント講座
「落雷」・・・3
- ◆オリンピック問題・葛西臨海公園探鳥会リーダーに聞く・・・5
- ◆探鳥会保険集計結果
(2013年9月分)・・・7
- ◆普及室からのお知らせ
・「研修プログラム『風力発電所の功罪』のご報告」・・・9
・『『トコロジストになろう!』が刊行されました!』・・・10
・「新入会員の方へ 2014年のオリジナルカレンダーをプレゼントしています!」・・・11
- ◆探鳥会スタッフ通信の購読について・・・11
- ◆編集後記・・・11

◆安西英明の探鳥会講座

「フィールドマナーの歴史や背景」

連携団体総会(11月9、10日)での探鳥会についての情報・意見交換では、事前に相談していた高知県支部、日本野鳥の会東京、日本野鳥の会栃木、日本野鳥の会ひょうごのほかにも、地元新聞への野鳥の連載が出版に至った山形県支部、女子探鳥会を試みているオホーツク支部などさまざまな取り組みを聞かせていただき、参考になり、励みにもなりました。この通信誌を通して共有していきたい各地の取り組みが、まだまだあるに違いないとも感じられた次第です。

■採らない、捨てない

今回は、柴田敏隆さんの野鳥誌連載『探鳥会のあり方と技術』(1973~74年)の序論(探鳥会の性格)から抜粋したが、その連載には「探鳥会の意義」と題して自然との接し方、フィールドマナーに関わる話題が2回分もある。

例えば、探鳥会の歴史に続いて、

「自然のものは皆のもの、自然のままを大切にすることが公衆の倫理であるという発想が、市井の自由人である中西会長の中から、しかも東洋風の自然観を母体として生まれてきたということは、日本の自然保護(思潮)史の中での、一エポックである」

などと記されている。あるいは、

「汎神論的自然観に立つ東洋の教えは、『己れを自然の一隅に、分に應じた依り処をもって位置づける』といった謙虚な姿勢をもつものであるが、これは、今日、生態学が教える、『人間も生態系の構成要因の一員である』といった学理に自ずとかなっている」

など、広い視点で論じている。その一方で、

「天文学者や天文愛好家が、天体を採集するだろうか?」

などと採集行為の是非について事こまかに論じている。当時、昆虫採集を趣味とする人からは「採らなければわからない」とか、理科の先生からは「採ることで覚える」などの主張もあったので、それらに対抗する必要が背景にあったのだろう。

柴田さんは、ポイ捨てという悪しき習慣に対しても厳しかった。探鳥会の度に「採らない」「捨てない」という注意を続けることの効用に関して聞かされた話を覚えている。柴田さん本人だったか、探鳥会参加者だったかよく覚えていないが、自宅が火事になったという物騒な話から始まり、消火器でなんとか初期消火はできたのだが、後で

ふとポケットに手を入れたら、抜いた消火器の栓が入っていた。捨てないことが習慣になると、緊急時でさえ捨てない、というような内容だったと思う。

■代償経験と原体験

連載中、柴田さんは、原体験の重要性も説いている。

「我々の日常が、近年、急激に都市化してきて、その結果、自然から隔離されて人々の生活が画一化し、単純化してきた」

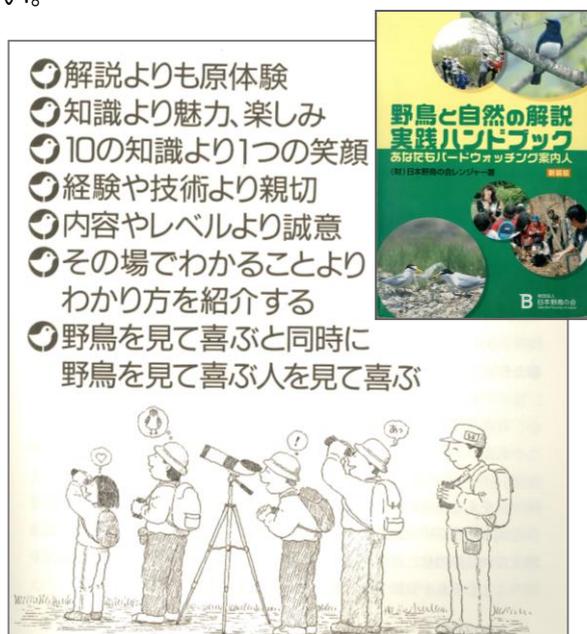
「最近では、マスコミなどによって氾濫する情報や、特にTVのような映像文化に依った二次的代償経験で満足してしまう人々が多くなった」

などの問題提起から、

「心身ともに発達期にある青少年が、そのバイタリティーを枯渇させ、創造性の芽生えを摘むようであってはならない」

と教育論にまで至り、探鳥会はあるがままの自然に触れる原体験の場としても重要だと書いている。パソコンやテレビゲームが当たり前となった今日、その重要性はさらに増していると言えないだろうか。

当会発行の『野鳥と自然の解説実践ハンドブック』をお持ちの方は、P185を見ていただきたい。



▲『野鳥と自然の解説実践ハンドブック』の表紙（右上）とP185（左下）

そこに書かれている、初心者に対するリーダーの心構えの標語には「知識より魅力、楽しみ」「経験や技術より親切」などの前、真っ先に「解説よりも原体験」と書かれているのは、柴田さんの教えが元になっている。案内人やリーダーは出会った野鳥についての解説を考えるが、まずは「どのように出会っていただくか?」「参加者にどのような体験をしていただくか」が先で、参加者の主体性や原体験を大事にすべきという意味がある。また、解説は原体験の補足と捉えれば、少しは気も楽になるのではないかという意図もある。野鳥そのものが魅力的で、出会いそのものが感動的であれば、解説は不要ということだってあるだろう。

■「やさしいきもち」と当会の歴史

柴田さんによるマナー関連の記載の最後は手厳しいが、そのまま抜粋しておこう。

「珍鳥希種を追うことのみならず、よい生態写真が撮れば対象になった野鳥のその後がどうなろうと意に介さないといった『鳥キチ』や『野鳥乞食』のような下衆の存在を絶対に許さない厳しいモラルを、常に忘れないでいたいものである」

フィールドマナーの標語「やさしいきもち」は、その後、野鳥誌の初心者向けコーナーとして連載された『ビギナー・アングル』（1978～80年）から生まれたものと記憶している。今日、当会ホームページでも当会発行の図鑑でも欠かさないようにしている。

野鳥図鑑は好みもあるし、良し悪しの観点は様々だが、探鳥会では当会発行物を使っていたらフィールドマナーの紹介、説明、確認ができる。『フィールドガイド日本の野鳥』の場合は、増補改訂版を私が担当した際、前書きに続いてP8に囲みで入れた。ちなみにどの図鑑でもフィールドマナーだけでなく、今日的課題に関連させて当会の理念や活動に触れるように工夫してきたが、この春発行した『新・山野の鳥』『新・水辺の鳥』の改定版の「はじめに」では、「1934年に中西悟堂が創設した」と当会の歴史にも触れるようにした。

（普及室/安西英明）

シリーズ第8回：落雷

■サッカー試合中の落雷事故例から学ぶこと

サッカーの試合中に落雷があり、高校生の選手を直撃。被害を受けた生徒は、視力障害や両上肢機能障害等の重度の後遺症が残ったため、被害者側が担当教諭や主催者（体育協会）を訴えた事例がある。

この事故の場合、生徒と家族は6億円の損害賠償を請求した。これに対し、一審は「引率教諭らが落雷を予見することは不可能だった」、二審でも「ほとんどの者が落雷の危険性を全くあるいはほとんど感じていなかった」として請求を棄却した。ところが、最高裁は「事故は予見可能であった」として本件を高等裁判所に差し戻す判決を言い渡したのである。この結果、差し戻し控訴審で本人と家族に総額3億7百万円を高校と体協に対し連帯で支払うよう命じた。

この結果、高額な支払いを科せられた体協は、倒産の手続きをせざるを得なくなったのである。探鳥会は、大河川の河口域や海岸部など、サッカー会場と同じような環境下で実施することが少なくなく、この事例は人ごとではない。

そこで、落雷に関する知識についてよく学んでおき、探鳥会における適切な対処が必要である。

落雷による死傷事故は、毎年5～10数件発生（例えば、H5:5件、H6:11件、H7:10件）しており、1954～1989年の36年間では平均22人、2000～2009年では平均14.8人が死亡している。人が落雷を受けると、約80%が即死するといわれている。

雷は、電気を通しやすい物質かどうかに関わらず、高い場所に落ちやすい。以前は、「指輪や時計など身につけている金属類が落雷を引き寄せから、速やかに金属をはずすこと」などが指導されていたが、全くの見当違いであることが分かってきた。

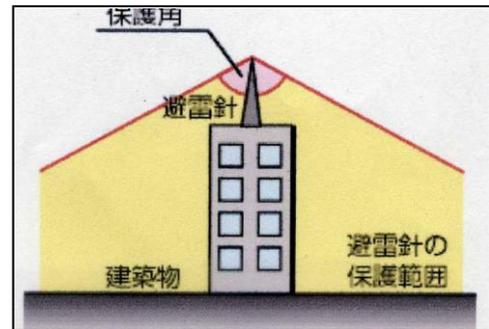
また、ゴム長靴やレインコートなどの絶縁物を身につけていても、雷から身を守る効果はないことも分かっている。

避雷針で保護される範囲（保護範囲）は、先端部から60°の範囲の円錐状のエリアであるが、下図のように最近JIS規格が変更され、回転球体法による保護範囲が新たに設定されたので、よく理解しておく必要がある。

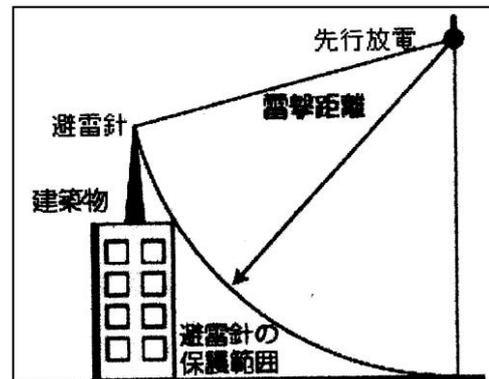


■落雷に関する知識

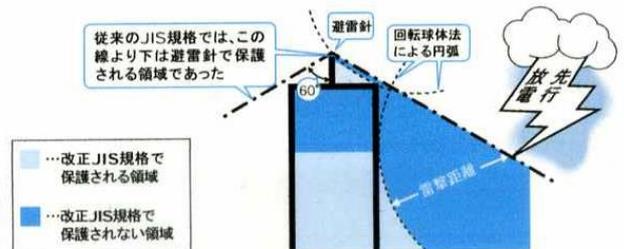
雷の威力は絶大で、電圧は約1億ボルト（一般家庭使用量の100万倍）、エネルギーは約300キロワット（一般家庭の2ヶ月分）に相当する。



*以前は保護角60°の円錐状の範囲であった



*回転球体法による避雷針の保護範囲の考え方



以上の他に、稲光を感じてから雷鳴が聞こえるまでの時間差が3秒の場合であれば、落雷地点までの距離は約1 kmであることや、雷雲（積乱雲・入道雲）の移動速度は時速10～40 km（秒速2.7～11.1m）で、あっという間に近づいてくることなども知識として知っておく必要がある。サッカー事故で「落雷は予見できた」と判断されたのは、このような雷に関する知識は指導者として知っていたはずの知識であるとされたからだ。また、「遠雷」といった言葉があるが、雷鳴の聞こえる範囲は約10 kmであり、そんなに遠くの雷が聞こえることはないことや、落雷と落雷の間は0～10分、最も頻度が高いのは15～16秒後だが、次の落雷がない安全時間というものも存在しないことなども知識として知っておく必要がある。

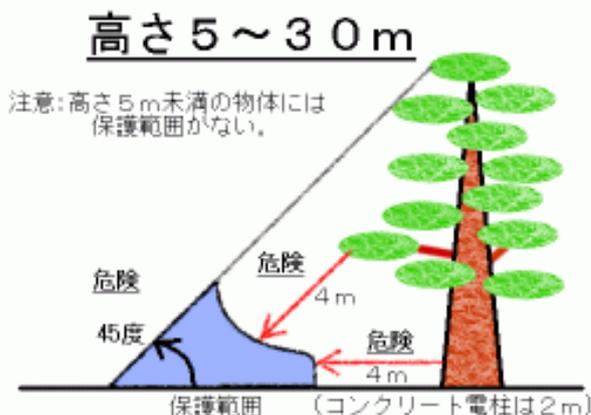
落雷は、近くの高い建物や樹木に落ちる。しかし、先行放電の位置などから必ずしも付近の最も高いものに避雷するとは限らない。

【落雷に対する対策】

野外で活動中に、雷が発生した場合には、次のような対応が必要である。なお、落雷に関する知識は次々と新しい情報が追加され変更されているので、最新の情報を得る努力が必要だ。

- 落雷地点まで離れていると推測した場合でも、早めの避難を（雷鳴の聞こえる範囲は10 km、聞こえているときには、次の雷が自分の近くに落ちる危険あり）
- 雷鳴が聞こえた場合は、野外活動は中断
- 雨が降っていても雷鳴が近くに聞こえる場合は、傘を閉じる（20cmの差が命取りの場合も）
- 高い木のそばは側撃雷に見舞われることが多いので避ける。どうしても他に高いものがない場合は、幹や枝から4m以上離れ、なおかつ樹木の先端が45°の角度で見える範囲内に低い姿勢でしゃがみ込む（図参照）
- 尾根筋など周囲に何も無い場所であれば、その場でできるだけ低い姿勢をとり、両足を揃えてしゃがむ（稜線などの場合は、窪みを探し分散する）
- 高電圧の鉄塔がある場合は、その下2m以上離れた場所に避難する（図参照）
- 建物に避難した場合でも、電気機器や壁から1m以上離れる
- ストックを持っている場合には、伸ばして自分の両サイド1mの位置の地面に倒しておき、その間に伏せる
- 釣り竿や金属バットを振りかざして持つのをやめる
- 落雷は雨の降り出す前や、小やみの時に多く発生するので要注意（降水量のピークは落雷頻度のピークの約5分後）

のピークの約5分後）



【落雷の予測】

落雷被害を避けるためには、これまで述べたような落雷に関する一般的な知識を習得しておくと共に、指導者は落雷の予測をする必要がある。落雷の予測には次のような方法がある。

- ①人間の五感で判断する
 - 雷鳴を聞くこと（雷鳴が聞こえる範囲は10 km、落雷地点の移動距離は1～10 kmの範囲 → 雷鳴が少しでも聞こえる場合は危険信号！）
 - 雷雲（入道雲）の発達や頭上の厚い雲の広がりを観察する
- ②ラジオや無線機に受信される雷電波等を利用する
 - 携帯型雷警報器や古いラジオ（AM）は、約50 km以内の雑音を拾う。間隔が短くなり激しく連続的になると要注意〔注〕最近のラジオは雑音処理機能が整備されているものが多いので、注意のこと
- ③天気予報・注意報を活用する
 - 最近の天気予報はかなり正確であり、地域的な詳細情報を入手できる場合もある。天気予報は必ずチェックし活用しよう。

（理事長/佐藤仁志）

◆オリンピック問題・葛西臨海公園探鳥会リーダーに聞く

*2020 年に開催されるオリンピックの東京誘致計画において、カヌー・スラローム競技の建設予定地にされている葛西臨海公園。その葛西臨海公園で探鳥会のリーダーをしている、日本野鳥の会東京の落合はるなさん(25)にお聞きました。

—落合さんが葛西臨海公園に行くようになったきっかけを教えてください。

小学生のときから鳥が好きでしたが、受験をしていたり、両親も鳥に興味がなかったりで、鳥を見に外に連れて行ってもらうことはありませんでした。機会がないまま過ぎていたのですが、中学生のときに三番瀬で開催された干潟祭りに行き、そこで開かれていた自然観察会で飯田さん(葛西臨海公園探鳥会担当リーダー)と出会いました。飯田さんに「次は自分が担当している葛西に来ないか」と誘われ、そこからほぼ毎月、葛西の探鳥会に通うようになりました。

探鳥会以外でも、飯田さんが関わっているゴミ拾いや鳥の調査、観察会などのイベントがあると誘われて参加していたので、月1、2回以上は葛西に行っていました。

—担当になったのはいつですか。

今から約7年前の大学一年生のときです。

探鳥会に通うようになってから、早い段階で、飯田さんに望遠鏡と三脚を貸してもらいました。その際、自分で見るだけでなく、周りの人にも覗いてもらうということを自然に行っていました。その様子を見ていた飯田さんが「早めに担当になってもらおう」と思ったようです。

—落合さんにとって葛西臨海公園はどのようなところですか。

鳥仲間を作ってきたのも、鳥を覚えたのも葛西ですので、自分のベースになっているような場所です。自分でいろんなところに行けなかった十代の頃も、探鳥会で出会った人たちに、戸隠や奥日光に連れて行ってもらいました。

—落合さんはどのような思いでオリンピック問題に関わっていますか。

初めの頃は、やはり葛西は自分が鳥を学んだルートでもあるのと、これまで大変お世話になってきた飯田さんが力を入れて活動している様子を間近で見て、自分も何か手伝わないかという思い

から、出来ることから始めていました。

しかし昨年、日本野鳥の会東京の17名いる幹事の1人になってからは、日本野鳥の会東京としてこれからどういう立場をとって動いていくかを考えたり、財団を含めた日本野鳥の会の見られ方を意識したりするようになり、より大きい視点で全体を見ようと思う気持ちが芽生えてきました。

今は、『葛西を守ろう』という1つの大きなプロジェクトを動かしている一員としての責任や役割の大きさを実感しながら取り組んでいます。これは普段の仕事では体験できないことなので、今後自分の仕事でも活かせることだと思っています。

—これまでに具体的にはどのような活動をして来ましたか。

昨年 2020 年オリンピックの問題が浮上してから、国際オリンピック委員会へ意見書の提出や都への申し入れなどを続けています。都との話し合いは平日にあるので、私はあまり参加出来ないのですが、2回程行き、議事録を書くなどしています。

また、葛西での月例探鳥会では建設予定地を通るので、毎回紙芝居を広げてこの問題について参加者に伝えてきました。その他、団体署名に続き、今年10月からはWEB署名を集めています。



▲探鳥会で紙芝居を使ってオリンピック問題について説明。左が飯田さん、右が落合さん。(9/22)

—WEB署名の募集チラシは全国の連携団体にお

送りし、署名をお願いしていますね。

葛西問題がマスコミで紹介されることが増えてきて、「私も何か協力したい」という声が多く聞かれるようになってきました。そこで、私たちの活動への応援の声を、ひとつの成果が見える形にしたいと考え、WEB署名の活動を始めました。今月、日本野鳥の会の横の繋がりを頼りに、チラシで拡散させていただきました。ご協力いただければ幸いです。

※WEB署名の方法

簡単WEB署名で募集中！

1. いずれかの方法でアクセス

QRコードで
署名サイトへ

当会ブログから
署名サイトへ


<http://goo.gl/0Hy1Ie>

野鳥の会 ネット署名

2. ページ右上の必要事項を入力し、「賛同」をクリック！

—9月22日に Young 探鳥会と合同で開催された月例葛西臨海公園探鳥会には、100名の参加がありました。

葛西で、Young 探鳥会と合同で月例探鳥会を実施するのは1年ぶりでしたが、現地を直接見ながら説明できる絶好の機会なので、若い人たちと葛西問題を共有することを目標にしていました。



▲観察の様子。手前が落合さん。(9/22)

100名の参加があったのは、葛西問題への関心の高まりと Young 探鳥会を続けてきて常連が増えてきたことによるものだと思います。この探鳥会の反響は大きく、参加した学生の所属するサークルが、学園祭で葛西に関する展示をしてくれたり、WEB署名のチラシの設置に協力してくれたりしています。なお、10月の月例では常連の方だけでなく、報道などを通じて葛西に関心を持たれたと思われる地元の方の参加もありました。

葛西に来たことがなく自然に関心のないような一般の人にこの問題を知っていただく上では難しさも感じていますが、今後も探鳥会に来てくれた方に、活動に共感してもらえるような運営に努めていきたいです。



▲鳥合わせの様子。(9/22)

—どうもありがとうございました。

<まとめ>

現在進行中のこのオリンピック問題に対して、最前戦で戦っている落合さん。その熱意の背景には、子どもの頃から探鳥会に通い、そこで自分を導いてくれた人の力になりたいという思いがありました。

毎月同じ場所で長年に渡り観察を続ける定例探鳥会は、その場所の重要性を示す根拠となる種数データを提供できるだけでなく、一番大変なときに一緒に戦ってくれる『人』を育てるという意義を持っているのだと実感しました。今回お話を聞き、日々奮闘を続けている落合さんの姿に探鳥会の価値そのものを見たように思いました。

(普及室/堀本理華)

◆探鳥会保険集計結果（2013年9月分）

9月は66支部からご報告をいただき、計230回の探鳥会が開催され、のべ3,976人が参加されました。

表1. 9月の探鳥会保険集計結果（2013年10月15日現在）

支部	開催回数 (回)	参加者数		スタッフ数 (人)	合計人数 (人)
		会員(人)	非会員(人)		
小清水	-	-	-	-	-
オホーツク支部	2	33	3	2	38
根室支部	-	-	-	-	-
釧路支部	1	9	9	3	21
NPO法人日本野鳥の会十勝支部	-	-	-	-	-
旭川支部	1	36	0	3	39
滝川支部	1	16	1	2	19
道北支部	1	3	19	3	25
江別支部	-	-	-	-	-
札幌支部	3	48	5	6	59
小樽支部	3	8	7	4	19
苫小牧支部	-	-	-	-	-
室蘭支部	1	9	0	1	10
函館支部	-	-	-	-	-
道南檜山	1	7	3	3	13
あおもり	-	-	-	-	-
弘前支部	3	24	3	3	30
秋田県支部	4	30	11	6	47
山形県支部	2	17	4	3	24
宮古支部	-	-	-	-	-
もりおか	1	6	0	1	7
北上支部	0	0	0	0	0
宮城県支部	3	40	11	4	55
ふくしま	1	20	1	4	25
郡山支部	2	23	2	6	31
二本松	1	5	0	2	7
白河	0	0	0	0	0
会津支部	-	-	-	-	-
奥会津連合	-	-	-	-	-
いわき支部	2	39	2	2	43
福島県相双支部	-	-	-	-	-
南相馬	-	-	-	-	-
茨城県	13	120	58	21	199
栃木	-	-	-	-	-
群馬	12	84	25	27	136
吾妻	0	0	0	0	0
埼玉	2	35	4	18	57
千葉県	8	86	31	31	148
東京	11	266	15	47	328
奥多摩支部	10	190	22	29	241
神奈川支部	8	133	29	28	190
新潟県	-	-	-	-	-
佐渡支部	-	-	-	-	-

富山	2	20	3	2	25
石川	3	37	2	7	46
福井県	3	16	2	3	21
長野支部	4	42	3	8	53
軽井沢支部	1	10	16	1	27
諏訪	1	2	4	2	8
木曽支部	-	-	-	-	-
伊那谷支部	-	-	-	-	-
甲府支部	1	28	0	2	30
富士山麓支部	0	0	0	0	0
東富士	-	-	-	-	-
沼津支部	1	24	6	2	32
南富士支部	3	67	4	5	76
南伊豆	1	0	0	1	1
静岡支部	-	-	-	-	-
遠江	2	42	4	5	51
愛知県支部	9	54	36	23	113
岐阜	-	-	-	-	-
三重	4	33	17	6	56
奈良支部	4	72	0	8	80
和歌山県支部	1	6	4	2	12
滋賀	5	21	5	9	35
京都支部	5	42	37	11	90
大阪支部	19	222	41	79	342
ひょうご	5	95	39	8	142
NPO法人日本野鳥の会鳥取県支部	2	13	2	2	17
島根県支部	1	8	1	1	10
岡山県支部	4	82	29	10	121
広島県支部	5	84	60	10	154
山口県支部	4	29	12	4	45
香川県支部	2	28	1	3	32
徳島県支部	6	56	6	6	68
高知支部	-	-	-	-	-
愛媛	6	28	46	12	86
北九州	2	27	11	2	40
福岡支部	8	83	11	13	107
筑豊	6	43	0	10	53
筑後支部	3	13	1	3	17
佐賀県支部	4	58	16	5	79
長崎県支部	-	-	-	-	-
熊本県支部	2	12	6	2	20
大分県支部	1	10	6	2	18
宮崎県支部	2	14	3	2	19
鹿児島	1	25	11	3	39
やんばる支部	-	-	-	-	-
石垣島支部	-	-	-	-	-
西表支部	0	0	0	0	0
全国	230	2,733	710	533	3,976

備考：-は保険の申請がなかったことを示しています。

(普及室)

◆普及室からのお知らせ

■研修プログラム「風力発電所の功罪」のご報告■

現在、全国各地で開催されているブロック大会の場で、必ず話題になることの一つが風力発電への対応です。特に3.11以降、自然再生エネルギーが注目される中で、支部や連携団体（以下、支部）のみなさんの中には対応に追われている方も多と思います。

支部の方とお話していると、何の前触れもなく突然計画が露見するので、対応が後手後手に回ってしまうということをよくお聞きします。

そこで、事前に風力発電所建設への理解を深め、地域におけるメリット、デメリットを整理し、想定できる議論を押さえておくことは、野鳥保護にとっても、地域の合意形成にとっても大切なことではないか。各地のブロック大会に参加しているうちにそんな感想を持つようになりました。

そこで、8月27日に鶴居・伊藤タンチョウサンクチュアリにて、標記のような研修プログラムを試行として実施しましたのでご報告します。探鳥会とは直接関係はありませんが、支部の皆さんに少しでも参考になれば幸いです。

□概要

9月25日～30日に、鶴居・伊藤タンチョウサンクチュアリで開催された大学生を対象とした「FA ワークキャンプ」の中の一コマとして、2時間の室内プログラムをおこないました。

- 【実施日時】 2013年8月27日（火）
20:00～22:00
- 【実施場所】 鶴居・伊藤タンチョウサンクチュアリ
- 【参加者】 7名（FA ネットワークワークキャンプ参加者（6名）、黒沢釧路支部長）
- 【担当】 箱田敦只（普及室）、浦達也（自然保護室）

□研修のねらい

地域に風力発電所をつくることのメリットやデメリットを架空の議論を通して理解する。そして、自分の地域に問題が降りかかってきたための備える。

□進行

20:00 オリエンテーション

プログラムのねらいや進行について説明します。

風力発電についての架空の議論をおこなうために、参加者全員の配役を決めます。配役は「牧場経営者」「自然エネルギーの導入を推進する会の代表者」「地域の野鳥観察会の代表者」「景観を保存する会の代表者」「地元建設業者組合」「地域の実業家」など。

20:15 ロールプレイ「どうする風力発電所？」

状況設定シートを配布し、風力発電所建設計画がわが町にやってきたという設定で、上記で決めた配役に基づいて架空の町内会議をおこないました。

最後に、模造紙上でポストイットを整理し、どのような視点が出たか確認していきます。

21:15 まとめ

風力発電所建設問題について、よく議論になる論点を資料を配布して説明します。こちらは自然保護室が実際に事業者と交渉する中でよく出てくる議論を参考にしています。

21:30 質疑応答

22:00 終了



□結果

参加者がうまく議論に参加してくれるだろうか、ということをお心配していましたが、議論をかみ合わせるための状況設定シートが功を奏し、多くの意見が出ました。風力発電所建設の賛成派、反対派の意見がバランスよく出て、問題を理解するのに役立ちました。以下は参加者からの感想です。

＜参加者の感想＞

- ・風力発電所建設にまつわる様々な問題を理解することができた。
- ・立場によって受け取り方が違うこと、そこからどのように対話によって結論を導き出すかということを考えさせられた。
- ・模造紙上で多くの視点を出し合い話し合うことができたため、さまざまな角度からこの問題を理解することができた。
- ・発言をポストイットに書いて出すことにより、小さな問題も見落とすことなく深く話し合うことができた。知らないことを知れてよかった。
- ・意見を出し周りにも伝わるよう1枚の模造紙に貼ってまとめることはそれぞれの考えの整理ができて、問題点等も出しやすいのでいいと思った。
- ・状況設定の文章があったので、議題が明確になってかみ合った議論ができた。

今回の試行プログラムを踏まえて、事前にこういったプログラムによってトレーニングしておくことは、風力発電所に関する合意形成には一定の効果が期待できるのではないかと考えられました。今後、もう少し実践を重ねながら、プログラムの例題の数を増やしたり改良を進めていきたいと思います。

支部からご要望があれば研修を実施できる体制を検討していきたいと思います。また、将来的には中学校や高等学校の環境学習プログラムとしての可能性も模索していきたいと思います。

□このプログラムに関するお問い合わせ

(公財)日本野鳥の会 普及室 箱田敦只

E-mail: hakoda@wbsj.org

TEL: 03-5436-2622

FAX: 03-5436-2635

(普及室/箱田敦只)

■「トコロジストになろう！」が刊行されました■

野鳥や自然を見るとき、ふたつのスタイルに分けることができます。ひとつはいろいろな場所へ行って見るというスタイル。もうひとつは、一か所自分の場所を決めて、その場所を見続けるというスタイルです。後者のスタイルのことを、「トコロジスト=その場所の専門家」と言います。

この言葉は、故 浜口哲一さん(元平塚市博物館館長、元神奈川支部支部長)により、2005年ごろから提唱された言葉です。ひとつの場所を隅から隅まで歩こう、野鳥だけでなく植物、昆虫、歴史、文化などにも関心を持ち、その土地に対して理解と愛着を持とう、と説かれています。

いうまでもなく「自分のフィールドを持って、その中のことに目を配る。」ということは、支部や連携団体の皆さんが日ごろ実践していることそのものです。皆さんにとって当たり前のことを、再定義したのが「トコロジスト」という言葉なのです。

このほど、「トコロジスト」について始めて書かれた出版物が出ました。書店には流通しません。

～体験編～と～実技編～の2冊セット 1000円で頒布します。

著者◎箱田敦只(日本野鳥の会普及室)

発行◎公益財団法人日本野鳥の会

変形B6判 96ページ

●「日本野鳥の会ブックレット②トコロジストになろう!体験編」

2008年に浜口さんの薫陶を受けて、トコロジストを目指し始めてから、どのように実践してきたのかについて書いた本。自分のフィールドを歩くことから広がる新しい世界について書かれた一冊です。

●「日本野鳥の会ブックレット③トコロジストになろう!実技編」

トコロジストとして活動するためのノウハウをまとめた一冊。フィールドワークの体験がない人でも取り組めるように書かれています!

＜お問い合わせ・お申し込み先＞

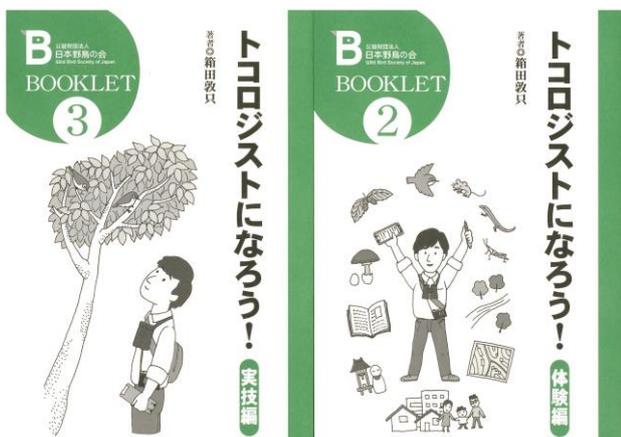
〒141-0031 東京都品川区西五反田3-9-23

丸和ビル(公財)日本野鳥の会 ブックレット係

TEL: 03-5436-2625

FAX: 03-5436-2635

E-mail: sanc@wbsj.org



<お申し込み方法>

「①ブックレット送付先の郵便番号、ご住所、②お名前（フリガナ）、③電話番号、④希望セット数（1セット1000円 送料込）、⑤トコロジストブックレット希望」と明記の上、上記住所に**合計金額分の切手**をお送りください。（現金書留でもお受けしています。）

※お送りいただいた個人情報は、当会規定に基づき適切に管理いたします。商品の発送のほか、今後当会のご案内をお送りさせていただくことがございます。

*バードプラザのご案内

ブックレットは財団事務所併設の「バードプラザ」でもお求めいただけます。

〒141-0031 東京都品川区西五反田 3-9-23
丸和ビル3Fバードプラザ

アクセス：東急目黒線不動前駅より徒歩約5分

TEL：03-5436-2624

FAX：03-5436-2636

営業時間：平日11:00~17:00

定休日：土曜、日曜、祝・祭日、年末年始

（普及室／箱田敦只）

■新入会員の方へ 2014年のオリジナルカレンダーをプレゼントしています！■

日本野鳥の会創立80周年のプレ企画として、2013年4~12月に入会申し込みをされたみなさまへ「2014年版カレンダー」をプレゼントしています。この機会に、入会をご検討の方へおすすめいただき、入会促進にご利用ください。

なお、チラシ（B5版・カラー）を用意してあります。ご希望の場合は、支部単位でも探鳥会単位でも構いませんので、必要部数をご連絡ください。

<キャンペーンの内容>

【対象】

- ・期間 2013年4月1日~12月31日に、入会申し込みをされた方

- ・会員種別 おおぞら会員、青い鳥会員、赤い鳥会員、個人特別会員

【プレゼント内容】

「ワイルドバード・カレンダー2014」1本を、財団事務局より、新入会の方のご住所に郵送いたします。

<お問い合わせ>

（公財）日本野鳥の会 普及室販売出版グループ
TEL：03-5436-2626

E-mail：birdshop@wbsj.org

ホームページ：

<http://www.wbsj.org/join/join-and-change-s/personal/join-gift/>

（普及室／江面康子）

◆探鳥会スタッフ通信（電子メール版）の購読について

探鳥会スタッフ通信は、支部の探鳥会スタッフならどなたでも購読できます。（無料です）

ご希望の方は、「探鳥会スタッフ通信希望」と明記のうえ、①支部名 ②担当している探鳥会名 ③お名前 ④ご住所 ⑤電話番号 ⑥メールアドレス（パソコンやスマートフォンのアドレス）を記

入し、tanchu-staff@wbsj.orgへお申し込みください。バックナンバーとともにメール版を送信いたします。

配信を希望されない、メールアドレスの変更などについても、tanchu-staff@wbsj.orgまでお知らせください。

★編集後記

すっかり低くなった陽射しや冴え渡る夜空に冬の到来を感じる季節となりました。

先日の連携団体総会では、各地で行われているアイディア溢れる取り組みについてお聞きすることができました。今後探鳥会スタッフ通信では、連携団体の皆さんからの投稿によるページをつくり、全国の事例を共有できるようにしていきたいと思っています。よろしく願いいたします。

（普及室／堀本理華）

日本野鳥の会

探鳥会スタッフ通信 第8号

◆発行

(公財)日本野鳥の会 2013年11月26日

◆担当

普及室 普及教育グループ

〒141-0031

東京都品川区西五反田 3-9-23 丸和ビル

TEL : 03-5436-2622

FAX : 03-5436-2635

E-mail : tancho-staff@wbsj.org
